

安井仲治

日本の写真史にその名を刻んだ大阪の偉大な写真家たち。その写真家が写し出した作品から、大阪の都市の様相を振り返る。第1回は安井仲治の《平野町》。

はたなか・あきひろ 1962年大阪生まれ。民俗学者。編集者として『月刊太陽』のほか、荒木経惟、佐内正史、石川直樹らの写真集を手がける。著書に『天災と日本人』『21世紀の民俗学』『死者の民主主義』『廃仏毀釈』『宮本常一』『関東大震災』ほか、共著に『宮本常一と写真』がある。

変貌する大都市大阪の過渡期を写す

安井仲治（1903～1942）は大阪の明星商業学校（現・明星高等学校）を卒業後、家業の安井洋紙店に勤めながら、大阪市中を拠点に写真を撮り始めた。そして18歳の若さで、当時関西写真壇を牽引していた浪華写真倶楽部に入会する。初期の安井は絵画主義的な技法を用いた写真表現を追求するとともに、スナップショットで都市風景を活写した。

安井が活躍した1920年代から30年代、大阪は「大大阪時代」と呼ばれる変貌、発展の渦中にあった。1925年に市域拡張で東京市（当時）の人口を抜いた大阪市は、人口・面積・工業出荷額で国内第1位となり、世界6位の大都市に躍り出た。1929年に安井が撮った《平野町》はそんな大変貌の時期、過渡期を映し出すものだ。

安井が育った街でもある平野町は船場の北から6番目に位置する町で、江戸時代から明治末頃まで、市内の五大商店街の一つとして賑わい、昭和初期まで「1」の日と「6」の日には夜店が立った。安井の写真には3階建てのモダン建築、火の見櫓と電柱・電線、瓦葺きの小屋や商店らしき建物、徒歩で、あるいは自転車で行き交う人びとが捉えられている。東西に長細い平野町は平野町通が横切り、町の中ほどを御堂筋が交差する。御堂筋は1926年から拡張する工事が行われていたので、まさにその過渡期だった（なお「大阪瓦斯ビルディング」は33年3月に竣工している）。

実験的な作風への変化

安井は1930年代に入ると、ヨーロッパの先端的な写真表現の影響を受けた作品を創り出

すようになる。《凝視》は1931年に中之島公園で催されたメーデーを撮影した写真に、別の風景を合成した実験的な作品で、端正な構図で都市風景を切り取った《平野町》と比べると、大衆のダイナミズムを斬新な手法で定着しようとする作家の表現意欲を強く感じさせる。安井仲治は大阪の激動に合わせて、作風を大きく変えていったのだ。



安井仲治《凝視》1931年(2010年のニュープリント)
所蔵/兵庫県立美術館



安井仲治《平野町》1929年(2004年のニュープリント) 所蔵/渋谷区立松濤美術館